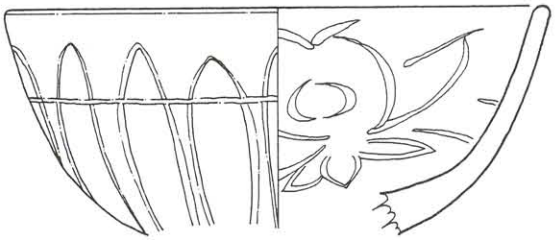
野尻町文化財調査報告書第３集

KAMI YA JYO SHI

紙屋城址遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書



1988. 3

宮崎県西諸県郡

野尻町教育委員会

野尻町文化財調査報告書第３集

KAMI YA JYO SHI

紙屋城址遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1988. 3

宮崎県西諸県郡
野尻町教育委員会

紙屋城址全景

序

漆野原ほ場整備事業にともない、遺跡発掘調査を、野尻町教育委員会は、三年間実施してきました。

本年度は、最終年度として、９月から12月にかけて、中世の山城址のある城原地区での発掘調査となりました。

昭和60、61年度が、旧石器・縄文時代等の遺跡調査であったのに比べて、本年度は、一部分で弥生時代にも至りましたが、主として中世の山城に関連する調査という特徴をもったものであったといえます。

紙屋城は、伊東48城のひとつであり、東・西・南方は深谷の絶壁の要害に囲まれ、北方に数多くの空堀を配置した、県内でも代表的な山城でありました。

この周辺調査で、鮮明に現存する第２の堀、土塁の保存と調査、第３の堀（薬研堀）の解明、第４の堀の発見や遺物収取の成果をあげることができました。さらに、弥生後期の花弁状住居址・中世の建物跡や多数の遺構・遺物が発見できたことも成果でありました。

３年間の最終年度として、無事に遺跡発掘調査が終了しましたことは、県文化課の適切な御指導・御援助と、多雨年の困難な中で、発掘作業に従事していただきました皆様の、御協力の賜と感謝申し上げます。

それとともに、漆野原土地改良区や大淀川下流土地改良事務所の皆様、調査地区の地主や生産者、ほ場整備工事業者の皆様等の御理解、御協力にも厚くお礼を申し上げます。

今後は、３年間の遺跡発掘調査の成果を、報告書にまとめるとともに、永久保存が可能になりました第２の空堀をはじめ、ふるさとの文化財を保護していく所存であります。

この調査に御協力いただきました全員の皆様、ありがとうございました。

昭和63年３月

野尻町教育委員会

教育長　今　吉　忠　義

例　　言

1．本書は漆野原県営圃場整備事業（昭和62年度分）に伴い野尻町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は昭和62年９月９日から12月25日に至る間実施している。

3．調査関係者は次のとおりである。

調査主体　　野尻町教育委員会

教　育　長　今　吉　忠　義
社会教育課長　吉　田　哲　幸
同　課長補佐　前　田　昌　重
同文化財担当　脇　村　一　也

調査担当　近藤　協（宮崎県教育庁文化課主任主事）

4．本遺跡調査においては、土壌分析を有村玄洋氏（県総合農業試験場）に依頼し、御所見をいただいた。また、陶磁器については、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に御教示いただいた。

5．本書の執筆は、第Ⅰ章１を、脇村がおこない、その他は近藤が執筆した。

6．本書の編集は近藤がおこなった。

7．本報告の方位は磁北であり、レベルは海抜絶対高である。

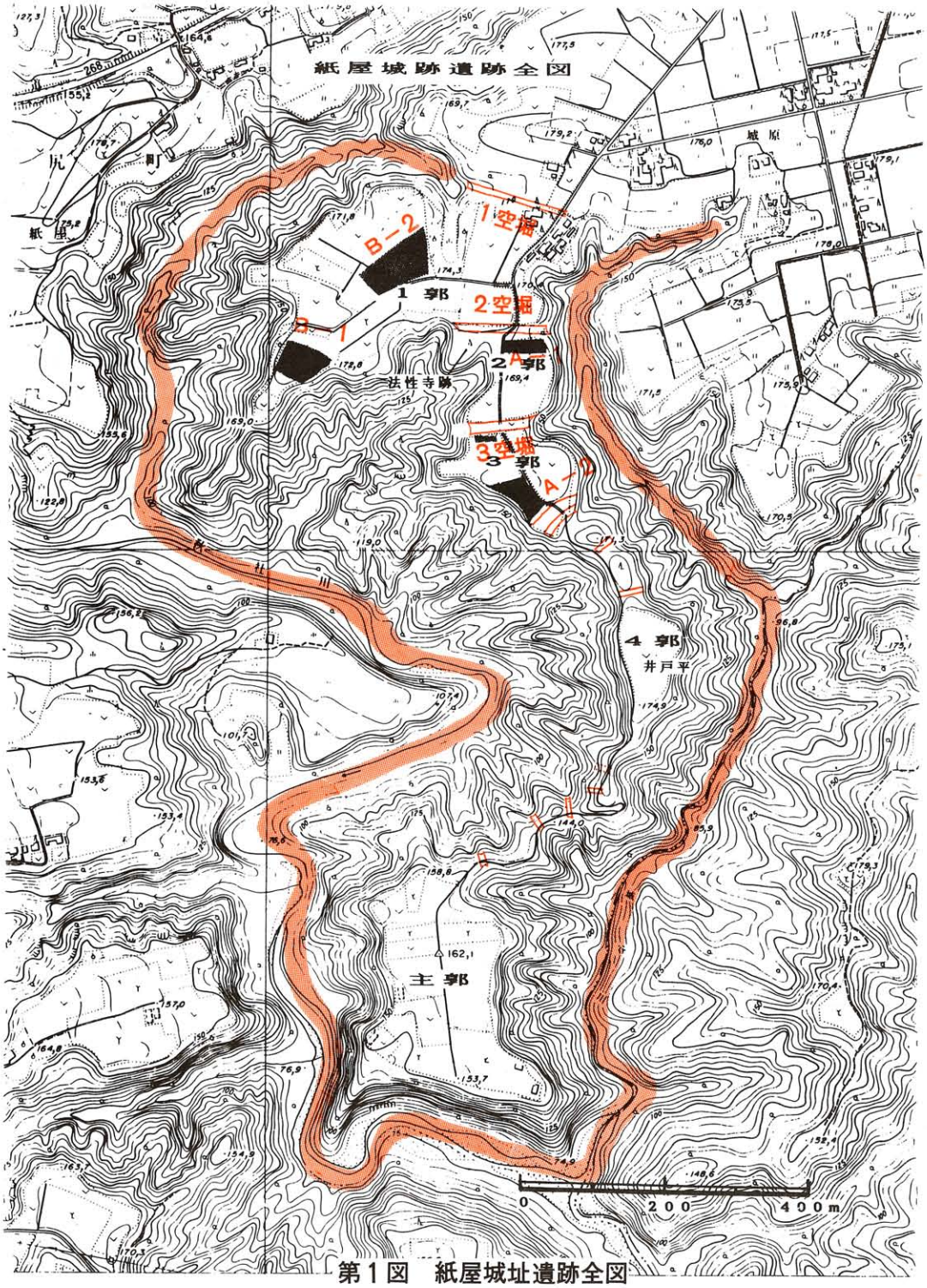
本文目次

第1章　はじめに……2
1．調査に至る経緯……2
2．遺跡の位置と周辺の歴史的環境の概要……2
第2章　調査の概要……3
1．調査の概要……3
2．層　序……6
3．A－1区の概要……7
①遺　構……7
②遺　物……9
4．B－1区の概要……10
①6号掘立柱建物……11
5．B－2区の概要……14
①1号竪穴住居址……14
②6号掘立柱建物……18
第3章　紙屋城の歴史概略……19
第4章　まとめ……19
付．紙屋城址遺跡における土壌調査……22

挿図目次

第1図　紙屋城址遺跡全図……1
第2図　野尻町主要遺跡位置図……3.4
第3図　紙屋城址遺跡基本土層図（A－2区）……7
第4図　A－1区pit 1・17断面図……7
第5図　紙屋城址遺跡A－1区出土遺物実測図……8
第6図　紙屋城址遺跡B－1発掘区遺構配置図……10
第7図　6号掘立柱建物実測図（B－1区）……11
第8図　紙屋城址第2空堀・土墨断面図……12

第９図　紙屋城址遺跡・Ｂ－２発掘区遺構配置図……15
第10図　紙屋城址遺跡・Ｂ－２区１号竪穴住居址実測図……16
第11図　１号竪穴住居址出土遺物……17
第12図　６号掘立柱建物実測図……18



第1図　紙屋城址遺跡全図

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

宮崎県西諸県郡野尻町において、昭和56年度から漆野原地区の県営圃場整備が行なわれている。それにより、昭和60年度に新村遺跡・高山遺跡、昭和61年度は漆野原第１遺跡、漆野原第２遺跡、漆野原第３遺跡の発掘調査を行い、記録保存の措置をとった。圃場整備事業最終年の昭和62年度も事業区内の埋蔵文化財の調査として分布、試掘調査が県文化課によって行なわれた。

事業区内に紙屋城址の土塁、空堀があることは確認されていたが、調査により、その他にも数ケ所の遺跡の存在が判明したため、大淀川下流土地改良事務所・漆野原土地改良区・県文化課・町教育委員会の４者で埋蔵文化財の保護について協議が行なわれ、通称第２の空堀は保存することになり、また事業施工上、現状保存が困難な部分もあり、その記録保存の措置をとることになった。これらの遺跡については城址に因む紙屋城遺跡の遺跡名が付され、調査は野尻町教育委員会が主体となり、県文化課近藤　協主事の担当で昭和62年９月９日から昭和62年12月25日まで発掘調査が行なわれた。

2．遺跡の位置と周辺の歴史的環境の概要

野尻町は県南西部の高標高地にあり、霧島山の東に展開する諸県盆地の一部を形成する。町域は南北に短かく（４～７km）、東西に長い（19km）。地勢は北に山地が連らなり、平坦面は小河川に開析された台地状地形や盆地からなっているが、一般に複雑に入りくんだ丘陵地形が発達している。この近辺は、いわゆる〝シラス〟といわれる灰白色火山灰が厚く堆積していることで知られるが、その他にも霧島山系の火山灰が複雑に重なりあっている。

古代日向十六駅のひとつである〝野後（のじり）〟駅に比定されているこの地は、旧石器時代から近世に至るながい時間に育まれた幾多の遺跡、史跡を内包している。紙屋城址遺跡に関連する時代の遺跡をあげれば、土壙墓・竪穴住居址を検出した弥生時代

後期の遺跡である大萩遺跡がある。本遺跡検出の竪穴住居址は、大萩遺跡の間仕きりを有する住居址と同類のもので、町内では今回の発掘で２例目となる。城址は紙屋城址のほか、野尻城址、漆野今城址、戸崎城址、高松城址、岩牟礼城址が知られているが、中世の典型的山城址として応時をしのばせるのは、このうち紙屋城址、野尻城址、戸崎城址がある。

以上他の時代の遺跡詳細については本報告にゆずりたい。

第２章　調査の概要

１．調査の概要

昭和62年度県営圃場整備事業漆野原地区にともなう埋蔵文化財発掘調査としておこなった紙屋城址遺跡発掘調査は、紙屋城域内に所在する圃場整備対象耕地（第１・２・３郭）について実施した。調査地は第１郭の２箇所（Ｂ－１・Ｂ－２区）、第２空堀および土塁、第２郭の１箇所（Ａ－１区）、第３空堀、第３郭の２箇所〔Ａ－１区・第４空堀(仮称)〕である。

紙屋城址遺跡は西諸県郡野尻町大字紙屋にある中世山城である。城跡は５つの郭を北から南に「Ｓ」字状に連続させて城域を形造る典型的な連郭式山城で、第１空堀から主郭まで約1,370m　ある。各々の郭は東西南面は険峻な急崖によって隔てられその急落する谷部には、東側、南側に秋社川、西側は城谷川が流れている。尾根部あるいは平担部を断ち切って各郭部を区切っている空堀は、北端の第１空堀から、主郭直前の12空堀まで、12条を数える。第１空堀から第３空堀までは、平担面を人工的に掘り切って構築されたもので、主郭側すなわち南側に土塁が構築されていたものと考えられるが、現在明瞭に残っているものは、第２空堀に付随する第２土塁のみとなっている。第５空堀から第12空堀は自然地形を巧みに利用したもので、急落する狭隘な谷部で断絶している。

第１郭……第１空堀と第２空堀間にあって、約61,300㎡の面積を有し、各郭部のなかでもっとも広い。Ｂ－１区・Ｂ－２区の２つ発掘区がある。

野尻町全図

第2図　野尻町主要遺跡位置図

番号	遺跡名
1	新村遺跡
2	高山遺跡
3	東城原遺跡
4	梯遺跡
5	九塚古墳
6	大萩遺跡
7	柿川内遺跡
8	**紙屋城跡**
9	戸崎城跡
10	野尻城跡
11	高松城跡
12	漆野城跡
13	紙屋今城跡
14	岩牟礼城跡

第２郭------第２空堀と第３空堀間にあって、11,100㎡ある。郭内西側には舌状の平坦面があって、法性寺跡といわれている。調査としては、第２空堀、第２土塁の農道となって断ち切られる部分について、断面の調査を行なっている他、Ａ－１区発掘区を設定している。

第３郭------第３空堀と第４空堀間にあって12,500㎡ある。南端にＡ－２区発掘区を設け、第３空堀についても調査を実施している。

第４郭------第７空堀と第８空堀間にあって、 7,500㎡ある。通称、〝井戸平〟（ツリンデラ）といわれ、城跡に関連する井戸跡が残る。調査対象外区である。

第５郭（主郭）------主郭であり、41,250㎡ある。５つの郭部のうち、もっとも標高が低く、平均標高 160m ほどである。調査対象外区である。

２．層　序（第３図）

紙屋城址遺跡の全発掘区の層序は、少なくとも考古学的な対象となる土層面までは、基本的には同一とみてさしつかえないものである。ここでは代表的な一例としてＢ－２区の土層断面図を掲載する。

Ⅰ層------赤ホヤ火山灰層である。降下火山灰層とおもわれ、最下層に比較的大粒のオレンヂパミス粒を含んでいる。橙色をしている。

Ⅱ層------漆黒粘質土。堅くしまる黒色帯。断面はテカテカ光る。Ⅲ層との層界は不明瞭でボーツとしている。

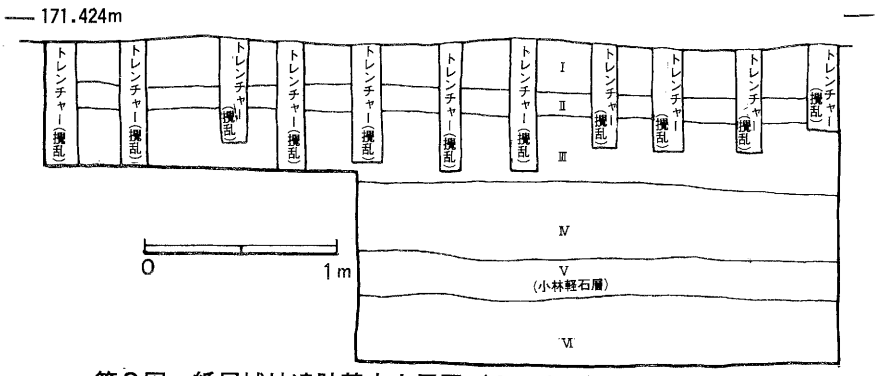
Ⅲ層------黒褐色土。　極めて堅くしまっている。乾燥すると不規則にヒビ割れる。白色小粒を多く含む。

Ⅳ層------暗褐色土。　粘性のある堅くしまった層である。小粒のオレンヂパミスを時に含む。

Ⅴ層------灰褐色土。　小林軽石層である。拇指大のオレンヂ色のパミスを多く含む。堅くしまっている。上下層との層界は極めて明瞭である。

Ⅵ層------褐色粘質土。粒子の細かい粘土である。他層に比較してやわらかい。灰色の卵大ブロックを時に含み、赤橙色微粒をみる。

なおⅠ層はＢ.Ｐ6000年～Ｂ.Ｐ 6,300年前、Ⅴ層はおよそＢＰ11,000年前に降下したとされる火山灰層である。



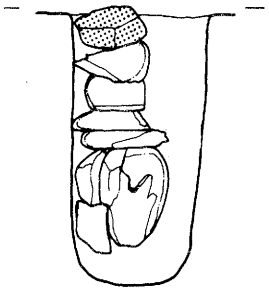
第３図　紙屋城址遺跡基本土層図（Ａ－２区）（1／40）

３．Ａ－１区

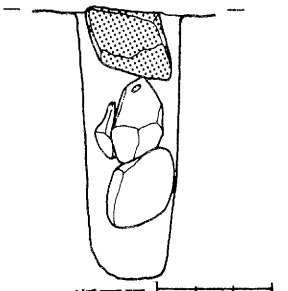
第２空堀と第３空堀にかこまれる部分、すなわち第２郭と考えられる範囲のうち比較的原地形の残存している部分、第２空堀付随の土塁から南へ20m に位置する 1,206㎡を調査対象とした。調査区は東西に長く、第２空堀（第２土塁）に平行しており、西にゆるく傾斜している。赤ホヤ上層で剝いだ面は、東西方向に全発掘にわたってトレンチャーが通っており柱穴等の遺構を少なからず損傷している。

検出された遺構は、不定形の土壙、多数の柱穴である。柱穴のなかには、礫を充塡するものが数個ある。柱穴中より出土した陶片、土師器片により、紙屋城址に関連した遺構であると考えられるが、掘立柱建物、その他の明確な施設をつかめていない。

Ａ－１区から第２土塁間は、土取りのため深く削平されており（約１ｍ）調査対象としていない。



pit17断面図

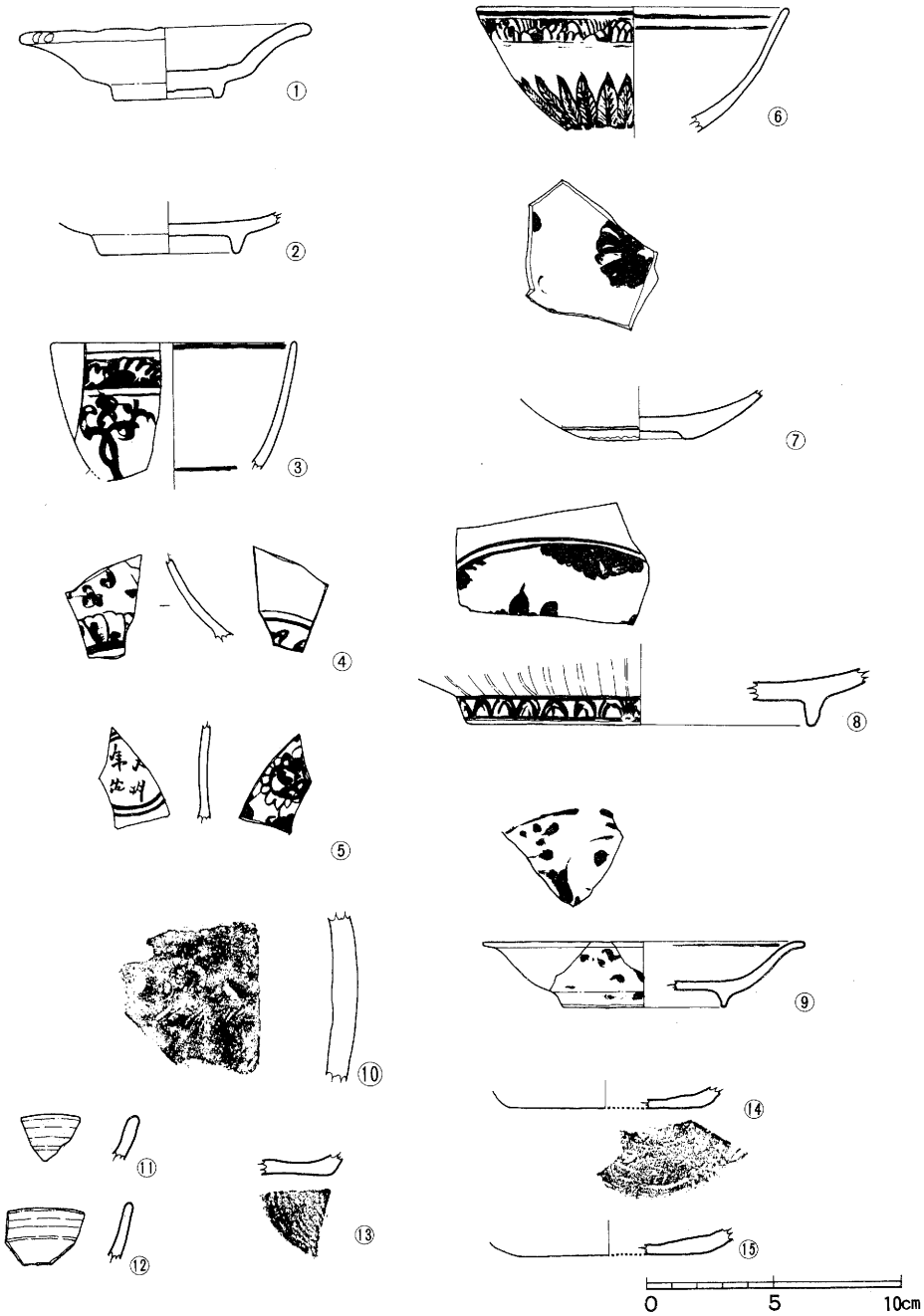


pit 1断面図　0　30cm
（スクリントーンは軟質凝灰岩・他は焼けた砂岩）

第４図　Ａ－１区pit１、17断面図（1／20）

① 遺構（第４図）

pit１は直径28cm、深さ71cmを測るもの。中に砂岩（硬質）円礫が２点、うち上位にあるものは小さな窪みがある。いずれも焼礫で赤褐色を呈する。最上部は軟質凝灰岩（通称灰石）がのる。検出面は赤ホヤ火山灰層で、カシワバン層まで掘られている。埋土は細粒の赤ホヤブロックの混るサラサラした暗褐色土である。礫は意図



第５図　紙屋城址遺跡Ａ－１区出土遺物実測図 (1／3)

的に投入、あるいは組み込まれたものとおもわれる。

pit17は長径37cm、深さ73cmを測る。pit中に人為的につまれたとおもわれる礫が詰っている。底には18cm×26cm大の楕円礫が立てられて、合計８点くらいの破砕礫がつまれる。すべて熱を受けて赤化している。最上位は軟質凝灰岩である。

② 遺物

青磁（第５図１）

口径10.5cmと小形の青磁稜花皿。完形ではないが、口縁から底部まで遺存する。焼きが不良で、不透明な灰緑色の釉色を呈する。見込は露胎で黒褐色をしている。15世紀後半から16世紀中葉にかけてのもの。

白磁（第５図２）

白磁皿の底部である。高台脇まで施釉あり、高台内は露胎となる。

染付（第５図３・４・５・６・７・８・９）

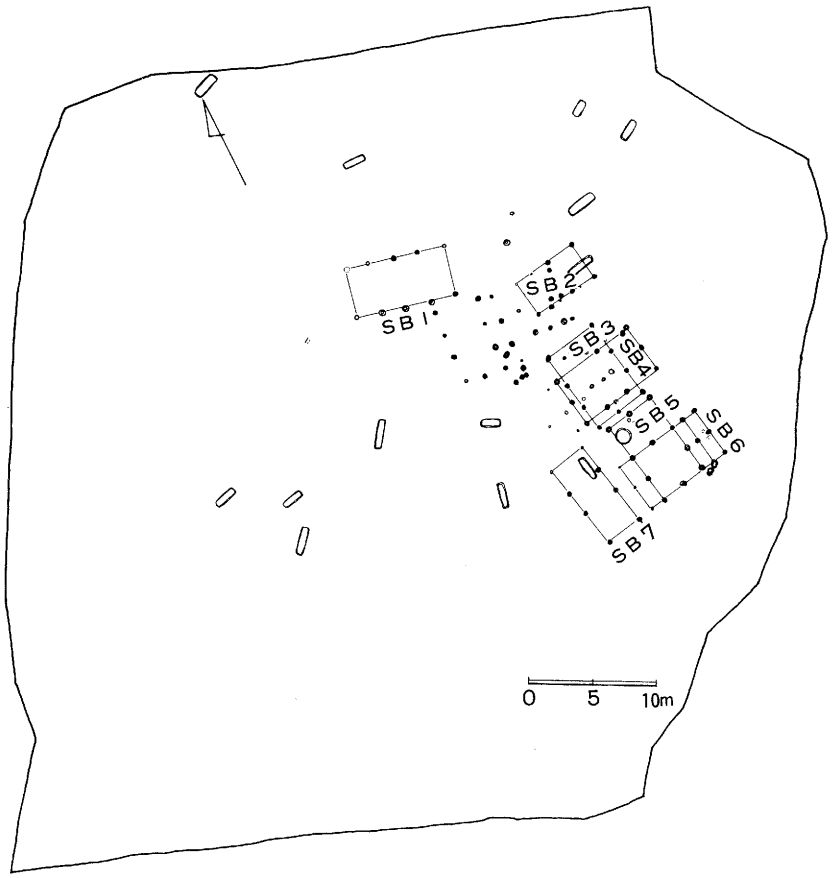
３.は景徳鎮窯系の染付碗。推定口径9.0cmを測る。 15世紀末から16世紀中葉。５.は同じく景徳鎮窯系碗の高台内部で〝大明年造〟銘がみえる。16世紀。６.はこれも景徳鎮窯系、染付蓮子（レンツー）形碗である。外面縁部に波涛文、腰部に蕉葉文がめぐる。15世紀末から16世紀中葉。７.は染付碁笥底皿。見込に花文、外面腰部に蕉葉文あり。畳付部は露胎となるが、内は施釉している。15世紀後半から16世紀中葉。景徳鎮窯系である。８.はピット中より出土した染付皿。内外側面に蓮弁文を陽刻している。16世紀前半から中葉。景徳鎮窯系である。９.は小形の染付皿、これもピットから出土したもの。見込に玉取獅子文、外面は唐草文であり、内側は釉がやや不透明。高台内は施釉され、露胎は畳付部のみとなる。15世紀末から16世紀中葉とおもわれる景徳鎮窯系。

瓦質土器（第５図10.）

印花文を施した火鉢かとおもわれる。内外面、黒灰色。内面は粗いナデ仕上げである。

土師皿（第５図11・12・13・14・15）

11.12.13.14.15は土師皿である。いずれもpit中から出土した。13は糸切底。14.はヘラ切り底を呈す。



第６図　紙屋城址遺跡・Ｂ－１発掘区遺構配置図（1／600）

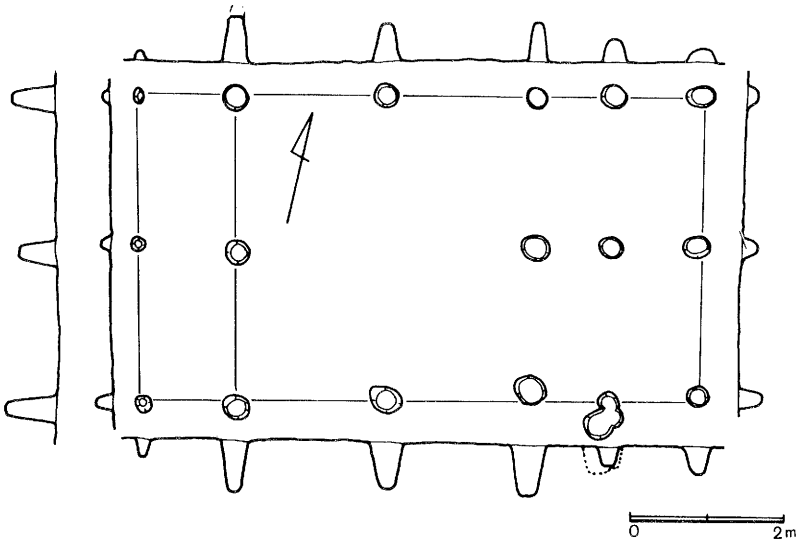
４．Ｂ－１区の概要

第１空堀と第２空堀間に囲まれた第１郭にあり、１郭の南西端隅にあたる。

調査区の北西部、南東部はすぐに急落して急崖を形成する。Ｂ－２区に近接しており、北東約 150m にＢ－２区をみる。Ｂ－１調査区は本年度調査した区画のなかで唯一、トレンチャーによる攪乱のない調査区である。

赤ホヤ火山灰上層で表土を剝いだ段階で地形をみると、南から北へ緩かに傾斜している。

検出された遺構は、掘立柱建物７棟（中世）、柱穴群、土壙である。掘立柱建物



第７図　６号掘立柱建物実測図（Ｂ－１区） 1／100

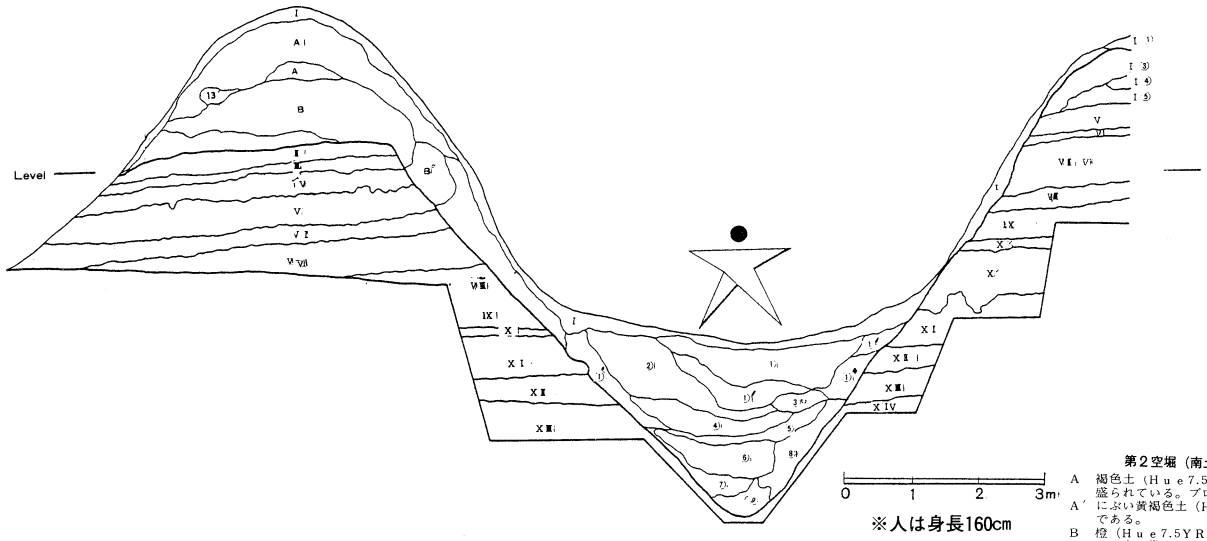
は発掘区中央から東側に集中して検出されているが、主軸方向から２群に分けられる。南北方向に主軸をもつもの（ＳＢ３.ＳＢ５.ＳＢ７）、東西方向に主軸をもつもの（ＳＢ１.ＳＢ２.ＳＢ４.ＳＢ６）、である。柱穴の検出数からして掘立柱建物が効率的に建ち、建てかえはみられるものの比較的短期間の居住域だったとおもわれる。

①６号掘立柱建物（Ｂ－１区）(第７図)

発掘区の南東端に位置しており、５号掘立柱建物と切り合っている。４柱穴を５号掘立柱建物と共有する。２間×２間の長方形プランを呈し、東西両翼に廂を付設する。梁行200cm、桁行は200cm、300cmを測る。桁行方向はＮ－15°－Ｅで、５号掘立柱建物とは直角に切り合う関係にある。総面積は20.32㎡、廂部を入れると29.78㎡である。

５．Ｂ－２区の概要

Ｂ－２区として設定した発掘区は紙屋城址遺跡中の第1空堀と第２空堀間、すなわち第１郭としてとらえられる範囲のうち、中央からやや西寄りの約5,570㎡、標高約171mの範囲で、Ｂ－１区に隣接している。



第2空堀（南土塁）土層

A　褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ4／4）やや粘性あるもののフカフカした褐色土が、盛られている。ブロック状になっている部分が多い。

A′　にぶい黄褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ5／3）Ａ層に赤ホヤ粒が混入している部分である。

B　橙（Ｈｕｅ7.5ＹＲ6／6）赤ホヤのブロックが盛られた層であり、ブロックは大は拳大となり、褐色土がその間に少量混っている。

B′　明褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ5／6）赤ホヤの粒子に褐色土が半々に混る部分である。

B″　明褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ5／8）赤ホヤブロックに褐色土が多く混っている部分である。

C　灰褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ4／2）中くらいの粒子の褐色土で、やや粘性、赤ホヤブロックを所々に含んでいる。
以上、Ａ～Ｃ層が人為的に盛られた土塁部分である。

D　黒褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ3／1）草根の多いサラサラした褐色土である。

Ⅰ　褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ4／6）―表土・草木根多し、サラサラして粘性なし。

Ⅰ①　黒褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ2／1）上部草根多い。表土
Ⅰ②　黒褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ3／2）混赤ホヤ小粒のサラサラしてしまりのないもの
Ⅰ③　極暗褐（Ｈｕｅ7.5ＹＲ2／3）比較的粒細かく、しまっている。断面にやや光沢あり。
Ⅰ④　黒色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ2／1）粒子こまかく、しまっている。軽石小粒を希に含む。
Ⅰ⑤　黒褐土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ2／2）大きな赤ホヤブロックを所々に含む。ややしまった黒土である。
} 畑土がおされてきたもの。

Ⅱ　暗褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ3／4）―よくしまった土壌で、小粒(1.0m 大)を含む。土塁が構築される以前の表層とおもわれる。
Ⅲ　にぶい黄褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ4／3）―粒子こまかく、やわらかい。均一な層となる。
Ⅳ　黒褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ2／2）―よくしまった均一な層で断面は光沢がある。
Ⅴ　黄橙色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ8／8）―赤ホヤ層である。サラサラして粘性なし。
Ⅵ　黒褐色土（Ｈｕｅ7.5ＹＲ3／1）―ひじょうにかたくしまり、粒子が細かい。断面に光沢がある。
Ⅶ　暗褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ3／4）／暗褐色土ににぶい黄褐色土が斑状に入る。かたくしまる。上層から下層へ漸次色調が明るくなる。
Ⅷ　灰オリーブ土（Ｈｕｅ５ＹＲ6／2）小林軽石層である。灰オリーブ色をしているが、赤ホヤに似た黄橙色大粒、明褐色大粒を含む。
Ⅸ　明黄褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ6／6）―ひじょうに堅くしまった層で、茶色の小粒が混っている。
Ⅹ　黄褐色土（Ｈｕｅ2.5ＹＲ5／4）―かたくしまった層で、小粒を多く含むものの粘性もある。
Ⅹ′　明黄褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ7／6）―おそらく軽石の風化した層で、粘性が強い。
ⅩⅠ　明黄褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ7／3）―大粒の小礫層である。黄色、明褐色、灰色、黒色の小粒がぎっしりつまっている。
ⅩⅡ　浅黄橙色土（Ｈｕｅ10ＹＲ8／4）―ひじょうに粘性が強い、軽石が風化したもので粘土化している。
ⅩⅢ　浅黄橙色土（Ｈｕｅ10ＹＲ8／3）―ひじょうに粘性が強い。ⅩⅡ層よりめだって粒（斑点状）が大きい風化軽石層である。

①　暗褐色粘質土（Ｈｕｅ10ＹＲ3／3）粒子はやや粗いが粘性が強く、断面は光沢をはなつ、草根がめだつ。
①′　黒褐色粘質土（Ｈｕｅ10ＹＲ3／2）粒子は粗く、①にくらべて粘性が弱い、草根が入る。
①″　黒褐色粘質土（Ｈｕｅ10ＹＲ3／3）粒子が細かく、やや粘性がある。
②　褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ4／4）粘性のつよい、中粒土、断面は光沢をもつ。
③　暗褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ3／3）①″にちかいが、それより粒子がさらに粗い。
④　黒褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ3／2）混小礫土で、1.0㎝大の小礫（軽石）が多く混る。レンズ状に入る。
⑤　灰黄褐土（Ｈｕｅ10ＹＲ4／2）④ににて、小礫を若干含む、色調がやや明るい。
⑥　黒褐色土（含赤ホヤ土）（Ｈｕｅ10ＹＲ3／1）サラサラした黒褐色土に、大きな赤ホヤブロックが入る。左側に多く混入
⑦　褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ4／4）細粒子のやや粘性土⑥との層界が明瞭である。
⑧　にぶい黄褐色土（Ｈｕｅ10ＹＲ5／4）細粒子の粘性の土、堀の斜面に沿って入る。
⑨　灰黄褐粘質土（Ｈｕｅ10ＹＲ4／2）粘性のつよい均一粒子土で、堀の最下底埋土である。

第8図　紙屋城址第2空堀・土塁断面図（1／160）

調査にあたっては、土層確認のためのトレンチを数ケ所に設定した後、重機によって赤ホヤ火山層直上で全面にわたって剝いでいる。　赤ホヤ火山灰層直上を全面精査の結果、弥生時代後期初頭の竪穴住居址２軒、中世の掘立柱建物跡７棟が検出された。発掘区は農道道路敷の部分幅約５ｍ、長さ60m の範囲を徐く全てが北西～南東方向のトレンチャーによって攪乱されているが、遺構の分布が比較的疎であることもあって、トレンチャーによる遺構破壊は、遺構全体の把握にとって最少限にとどめられている。

弥生時代の竪穴住居址は、発掘区北部に２軒隣接して確認している。２軒とも弥生時代後期初頭から古墳時代後期にかけて日向を中心に特徴的に出現する花弁状の特異な突出部を巡らすいわゆる花弁状住居址で、　一軒（SA １）は円形住居を基調として花びら状の突出を巡らすもの、一軒（SA ２）は正方形住居を基調として長軸上２ケ所に突出部を設けるものである。

Ｂ－２区で合計７棟検出した掘立柱建物は、大きく二群に分けられる。おおよそ南方向にその主軸をもつ一群（SB1 ,SB ２），おおよそ東西方向にその主軸をもつ一群（SB ３，SB ４，ＳＢ ５，SB ６，SB ７）である。柱穴埋土中に遺物を含む例は少ないが、数ケ所から青磁、白磁等の輸入陶磁器が出土している。全般に掘立柱建物の検出棟数に比較して、柱穴検出数が少なく、これもある限られた短期間の居住域だった可能性が高い。

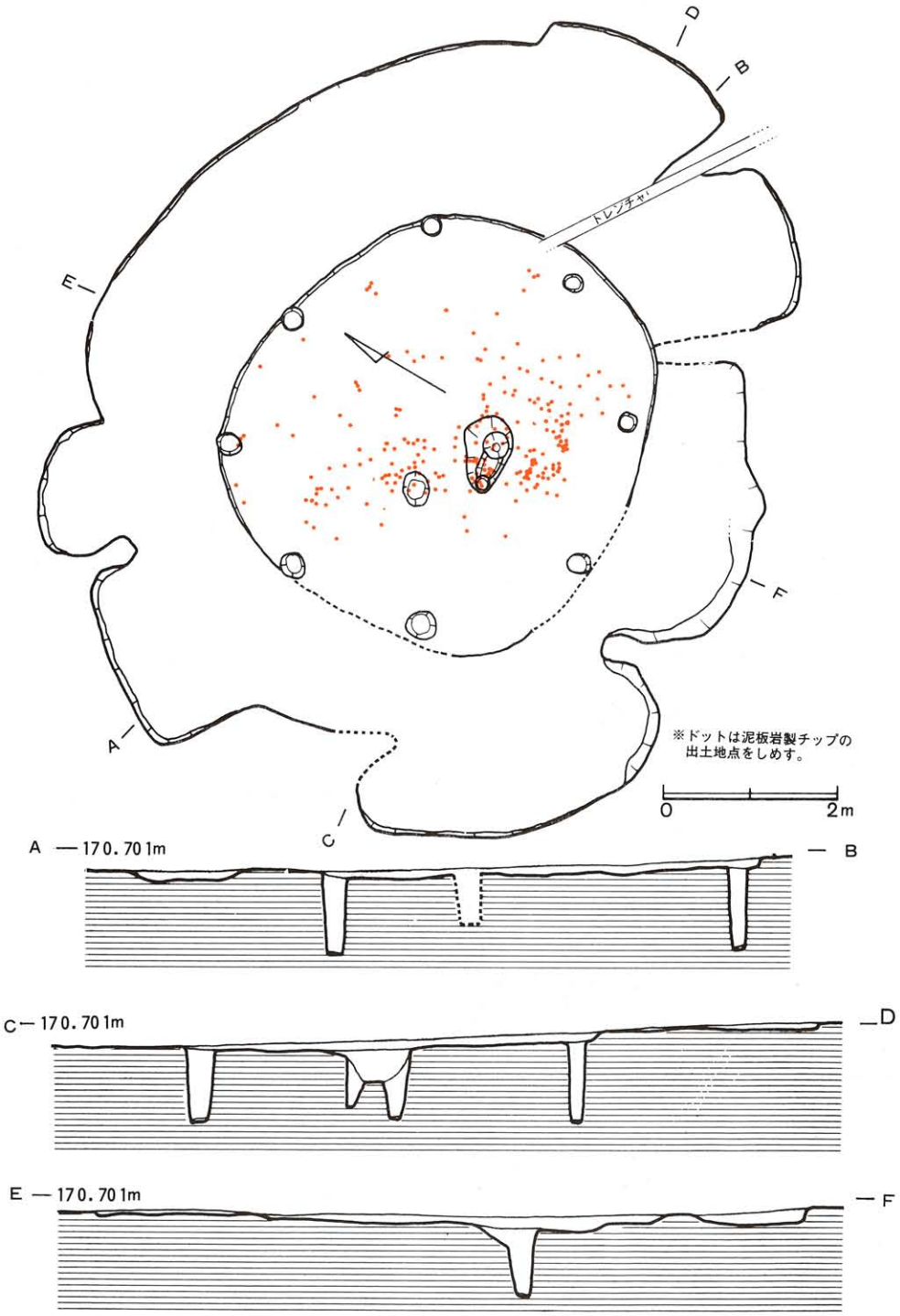
① １号竪穴住居址（第11図）

発掘区最北端隅にあり、２号竪穴住居址から北へ約10m のところに位置している。いわゆる花弁状の突出部をもつ竪穴住居址である。この住居址の全体の規模は南北径で8.0m 、東西径で9.45m の不正円形となり、同じく不正円を呈する中心部は最大径が5.0m 、最小径が4.6m を測る。 外縁となる突出部は、すでに大きく削平されており、浅い箇所では検出面からわずかに数cmを残すのみとなり、輪郭さえ不確実な部分がある。内円の床面に対して、外縁突出部床面は高くつくられてその比高は削平されているところで約3.0cm、比較的よく残っているところで約10cmほどある。

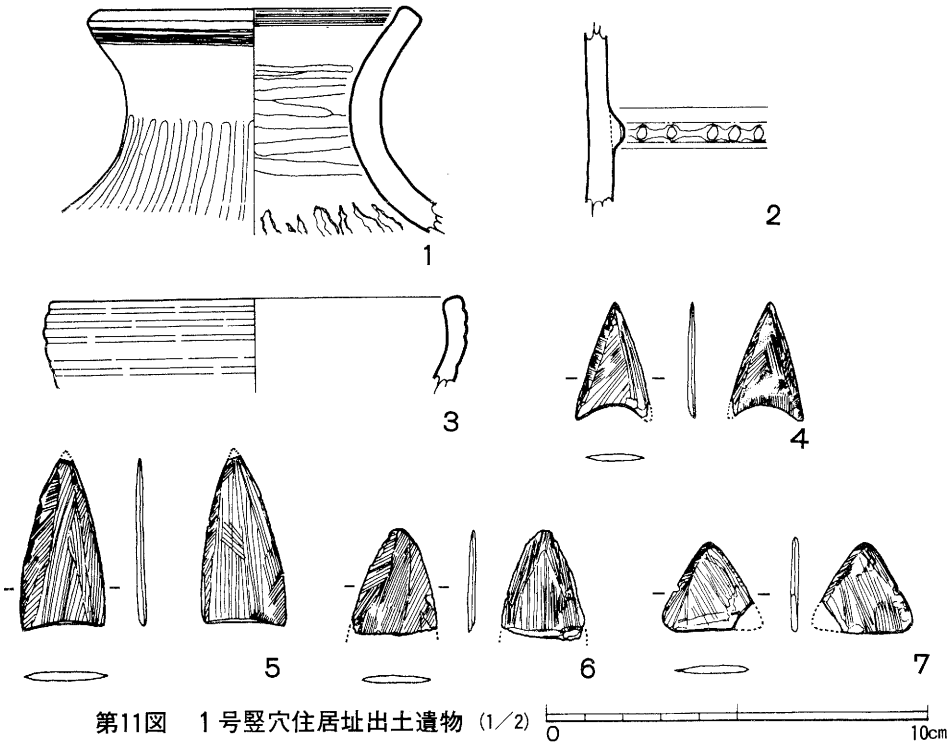
内円の円周に沿って８個の柱穴がほぼ等間隔にめぐっている。柱穴は直径22～30cmの円形を呈し、深さは床面から85cm～90cmを測る深くしっかりしたものである。

内円の中心部付近には、２個の大きな柱穴がNW－SE方向に並んでいる。ひとつ

第９図　紙屋城址遺跡Ｂ－２発掘区遺構配置図（1／600）



第10図　紙屋城址遺跡B－2区 1号竪穴住居址実測図 (1／80)



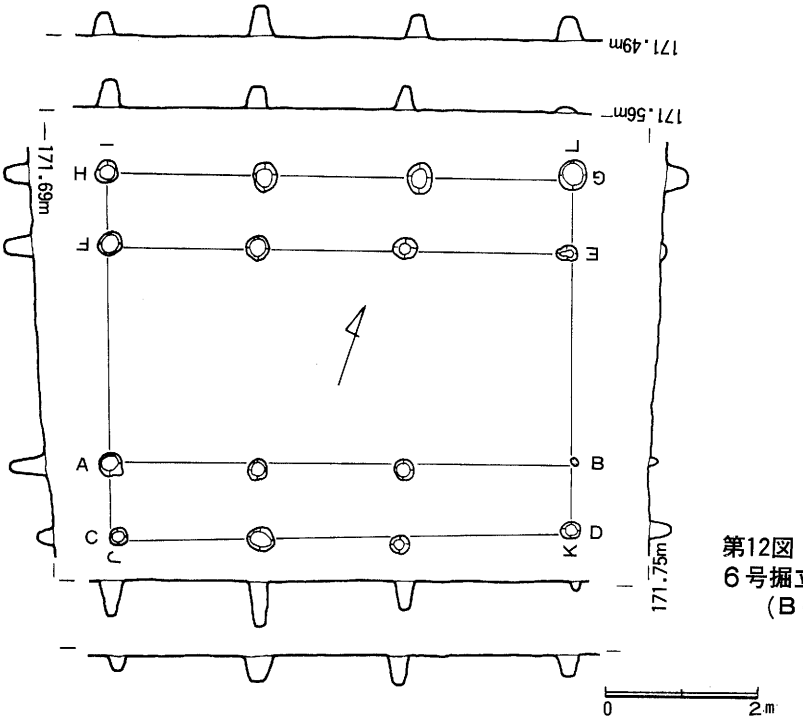
第11図　1号竪穴住居址出土遺物 (1／2)

は長径40cm、短径30cmを測る楕円形のもの、ひとつは長径85cm、短径55cmを測る長円形の掘り込み内に、大小の深い柱穴を有するものである。外縁の突出部は、隅丸の方形を意図しているとおもわれるが、いずれも不定形状で、6つの小はりだし部と、北縁に連続したはりだし部がある。

当住居址は、遺物の項で述べるように石器（磨製石鏃）製作の場として使用されている。

① 1号竪穴住居址出土遺物（第12図）

ＳＡ１からは、弥生土器３点、磨製石鏃（破片含）11点、砥石６点、泥板岩剝片1248点が出土している。１は壺形土器の口縁部付近で推定口径7.7cmを計測する。口唇部の外面および内面の直下に明瞭なヨコナデ調整痕を残している。外面の調整は頸部以下タテ方向の丁寧なヘラ調整。内部の頸部調整はヨコ方向のヘラ調整である。以下タテ方向の不整なタタキ調整に似た調整痕が観察される。胎土に1.0mm大の長石を多く含んでいる。また3.0mm大の白色石英を少し含む、内外とも橙色を呈し、焼きは比較的堅緻である。



第12図
６号掘立柱建物実測図
（Ｂ－２区）1／100

２は甕形土器の刻目突帯部で、口縁に近い部分かとおもわれる、風化が著しくひどく磨滅しており、砂粒がポロポロ落ちる。胎土に砂粒、石英、長石、角閃石がほぼ均等に含まれている。

３は凹線文を口縁部に施す土器で、器形は高坏形を呈するとおもわれる。 推定口径9.8cmと小形である。 胎土に多くの長石を含み、4.0mm大の白色石英を時に含む。焼成、胎土の感じから在地産とはおもわれない。内外とも灰褐色を呈する。

４.５.６.７.は11点出土した磨製石鏃のうち完形、完形に近いもの４点である。すべて暗灰色の泥板岩製である。７.は正三角形状を呈し、基部に抉りがない。

② ６号掘立柱建物（Ｂ－２区）(第13図)

東西方向に方向性を有する一群に属する。１間×３間の長方形プランを有する建物を基本に、南北の両翼に３間の廂を有する。廂の柱穴は基本の掘立柱建物を構成するそれと、直径、深さとも遜色ない。柱穴掘り形は殆ど円形で、径は25～35cm深さは検出面より7.5cm～60cmで平均35cm位である。柱間寸法は梁行が280cm、桁行が200、220cmを測る。桁行方向はＮ－18°－Ｅで、総面積は18.46㎡廂部をいれて31.46㎡となる。

Ｂ－２区では廂と考えられる付帯施設をもつ掘立柱建物はこの６号が唯一のものである。

第３章　紙屋城の歴史概略

紙屋城の創建については、記録がなく明らかではない。野尻町内に所在する野尻城、戸崎城とともに伊東氏の〝四十八城〟のうちのひとつに数えられている。

永禄年間（1558～1569年）の数年間は伊東氏が木崎原の戦い（元亀３年・1572年）において島津氏に大敗したあと、日向の覇権を失するまで全盛を極めた時期であるが、四十八城はその全盛期を象徴するものとなっている。紙屋城、野尻城、戸崎城の諸城が歴史の表舞台に登場するのは、皮肉なことに先述の伊東氏没落のまさにその時であり、伊東氏から島津氏へと日向の覇権が決定的となるきっかけをつくっている。

『日向記』はその間の経緯について大要次のように記している。伊東三位入道義祐の配下で、野尻城主であった福永丹波の守は、島津氏の策略もあって義祐の不興をかっていたが、天正５年（1577年）12月７日にはついに島津勢をその居城である野尻城に引き入れて、反旗を翻した。時の紙屋城主、米良主税助は福永丹波守と姻戚であったので、これと行動を同じくして伊東義祐に叛している。これらの動きに動揺した戸崎城の兵も遁走してしまい、もろくもこの三城は島津側の領するところとなった。福永丹波守の謀反に対して、本拠地の佐土原から紙屋に向っていた伊東義祐はこれに呼応するように各地で諸将の蜂起するのが伝えられると、やむなく佐土原にとって返したが、ここにも離反するものがあいつぎ、やむなく豊後に落ちのびることとなり、ここに伊東、島津の争覇戦に終止符がうたれることになるのである。この後、島津氏の領することとなった紙屋城であるが、この後の歴史も明確でなく、元和元年（1615年）の一国一城令によって廃城となったといわれている。

第４章　まとめ

漆野原圃場整備事業にともなう最後の発掘調査となった62年度事業区内における調査は、60・61年度が旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物の調査が

主であったのに対して、今回は中世山城郭内に所在する中世の遺構・遺物および弥生時代の遺構を中心とするものになった。これまで、県内で調査された中世城址は清武城[1]、中之城[2]、出水山（守永城か）[3]、今江城（仮称）[4]、車坂城[5]があり本城で6例目となる。中世の典型的な山城として知られる紙屋城の城域は、東西0.8km、南北1.5kmに及び、調査したのはそのうちの第1・2・3郭に所在する一角を対象にしたにすぎず、紙屋城の縄張り全域をカバーするには至っていない。しかし、それでもあわせて14棟の掘立柱建物や土塁・空掘等の遺構、それにともなって出土した輸入陶磁器などの遺物は、文献史料が語らない当時の生活や、史実の裏付け、あるいはそれを補塡するものになりうるとおもわれる。

掘立柱建物は、検出された柱穴から極めて効率的に建てることができており、建て替えはみられるものの、近辺からの出土遺物の少なさともかね合わせて考えるとき、恒常的に使用され続けた区画ではなく、〝戦〟に際して臨戦体制をとるべき生活空間との見方ができる。また、各郭部に占める位置関係とか、その規格性、個々の目的性、それに各郭間における時間的な差異等、検討すべき課題は多い。

紙屋城址に関連する出土遺物では、輸入陶磁器の占める割合が際立っている。その時期はほぼ15世紀中・後半から16世紀頃に限定される。なかでも、白磁・染付の碗皿類では、一、二点の福建、広東系を含むほかは、景徳鎮系が多く出土している。青磁碗のなかには、二次的に火を受けて釉が変質しているものがみうけられ、戦火にあった可能性も指摘できるところである。国産の陶器・土師器のうち、土師皿（坏）はヘラ切りはなし底、糸切りはなし底の両種が、主にA－1、A－2区から出土しているが量的には数少ない。紙屋城とほぼ同時期と考えられる清武城、中之城からはヘラ切り底土師皿（坏）は一点も出土しておらず、本城の両種の混在は、本県における糸切り底土師器の出現期からヘラ切り底、糸切り底混在期[6]、そして糸切り底中心の時期を特定するうえでの新たな資料となろう。

住居内に区画をつくり、間仕切り様を呈する弥生時代から古墳時代にかけての異形の住居址は、野尻町内では大萩遺跡の2例に次ぐ検出例となった。大萩遺跡のものは方形プランを基調として突出部[7]を設けるものだけであったが、今回は円形プランを基調として、その円周部外縁にそって区画部がめぐる、いわゆる花弁状住居址を方形のそれと合わせて検出することができた。1号竪穴住居では、その住居内より刻目突帯を有する甕（在来）とともに、口縁外面に数条の凵線を施す瀬戸内

系土器（外来）が出土し、その時期は花弁状住居出現期の弥生後期初頭にあてることができる。なお、その西限は、先年（1987年）永田原遺跡[8]（えびの市）において検出された古墳時代初頭期のものである。

以上、発掘調査によって明らかとなった事柄も多いが、それにも増して検討すべき課題が山積したというのが実感である。今後はそれらをひとつひとつ分析検討して本報告に期したい。

註　1．「清武城跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』宮崎県教育委員会 (1979)

2．『都城中之城』都城市教育委員会　(1983)

3．国富町に所在、未報告

4．「今江城跡」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(V)』宮崎県教育委員会（1985）

5．「車坂城跡」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(VI)』宮崎県教育委員会（1986）

6．谷口武範「土師器に関する二・三の問題について」・『山内石塔群』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第1集・宮崎県教育委員会（1984）

7．『大萩遺跡(2)』　瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 宮崎県教育委員会（1975）

8．『永田原遺跡』　上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要 えびの市教育委員会（1987）

紙屋城址遺跡における土壌調査

宮崎県総合農業試験場化学部

野尻町紙屋城址遺跡における土壌断面調査の結果は下記のとおりである。

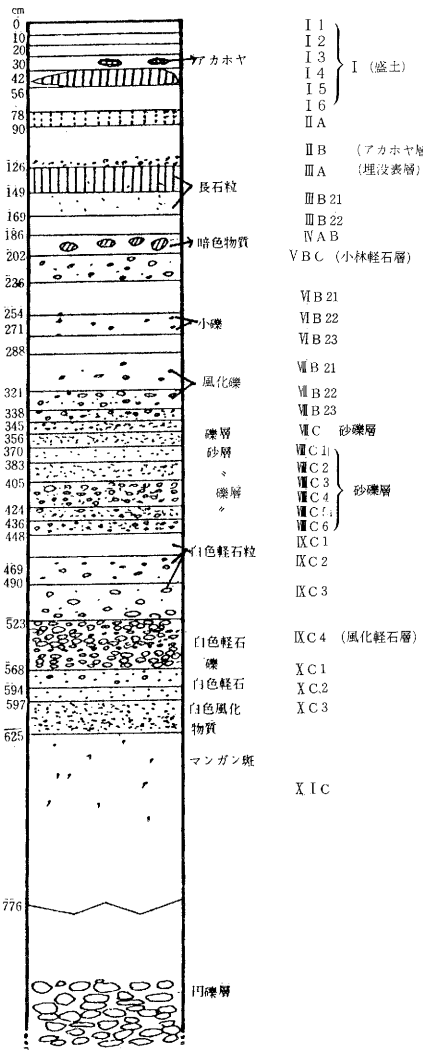
調査年月日：昭和６２年１０月１日

調査場所　：野尻町紙屋

　　紙屋城跡第３空堀

土壌群　　：黒ボク土

土壌断面記載：



Ⅰ１　０～10cm、黒褐（７.５ＹＲ３/１）～（７.５ＹＲ４/３）色の壌土（Ｌ）表層で、腐植にやや富み、発達弱度の細粒状構造を示す。粘着性弱、透水性大で、植物根に富む。極てやわらかい。層界は漸変。

Ⅰ２　10～20cm、黒（７.５ＹＲ２/１）～褐（７.５ＹＲ４/３）色の埴壌土（ＣＬ）～壌土（Ｌ）発達弱度の粒状構造、腐植を含み、粘着性小。透水性大で、植物根に富む。ち密度は８mm、層界は漸変。

Ⅰ３　20～30cm、黒褐（７.５ＹＲ２/２）～暗褐（７.５ＹＲ３/３）の色の壌土（Ｌ）、発達極弱度の塊状構造、腐植を含む。粘着性小、透水性中で、植物根を含む。ち密度は12mm、層界は漸変。

Ⅰ４　30～42cm、黒褐（７.５ＹＲ３/２）～明褐（７.５ＹＲ５/８）色の砂壌土（ＳＬ）～壌土（Ｌ）、発達弱度の塊状構造。アカホヤの小塊を含む。小孔隙あり。腐植を含む。粘着性小、ち密度は15mm、層界は漸変。

Ⅰ５　42～56cm、黒（７.５ＹＲ２/１）色の埴壌土（ＣＬ）で、レンズ状を示す。発達弱度の塊状構造、粘着性中、透水性中で、植物根あり。

ち密度は18mm、層界はやや明瞭。

Ⅰ6　56～78cm、褐（7.5YR4/6）色の壌土（L）、発達弱度の塊状構造、腐植を含む。小孔隙あり。粘着性やや中、透水性中。ち密度は15mm。層界はやや明瞭。

〔これらの各層は、いずれも人為による盛土部であると思われる。〕

ⅡA　78～90cm、黒褐（7.5YR3/2）色の微砂質壌土（SiL）で、現在の表層に相当する。発達弱度の塊状構造で、腐植にやや富む。細孔隙あり、粘着性中、透水性中、ち密度は18mm。層界は明瞭。

ⅡB　90～126cm、明褐（7.5YR5/8）色の砂壌土（SL）、アカホヤ層で、発達弱度の塊状構造、ノコクズ状を示し、火山ガラスに富み、軽い。可そ性、粘着性は極めて弱い。下部位（123～126cm）に、明褐（7.5YR5/8）色の軽石小粒あり。ち密度は25mm。層界は明瞭。

ⅢA　126～149cm、黒（10YR1.7/1）色の埴壌土（CL）、過去の表層（埋没表層）で、腐植にすこぶる富む。発達弱度～中度の塊状構造、可そ性、粘着性強、透水性中で、孔隙を含む。白色長石粒を含む。ち密度は28mmで、ちみつ。層界はやや漸変。

ⅢB21　149～169cm、褐（7.5YR4/3）色の埴壌土（CL）、発達中度の塊状構造を示す。腐植にやや富み軽い。可そ性、粘着性強、透水性中、ち密度は26mm。層界はやや漸変。

ⅢB22　169～186cm、褐（7.5YR4/4）色の埴壌土（CL）、発達中～弱度の塊状構造、腐植を含み、孔隙あり。小レキあり、可そ性、粘着性中、ち密度は23mmで、上層よりやわらかい。層界は漸変。

ⅣAB　186～202cm、暗褐（7.5YR3/3）～褐（7.5YR4/4）色の埴壌土（CL）、楕円状の暗色物質を含む。風化した軽石小粒を含む。多孔質で軽い。可そ性、粘着性中、透水性弱、ち密度は21mm～25mm。層界は漸変。

VBC　202～226cm、褐（7.5YR4/4）色の壌土（L）、発達中度の塊状構造で、腐植を含まず、小（5～6mm）粒の風化軽石やダイダイ（7.5YR6/8）色～白色小粒（長石粒）灰色小粒風化レキ〔小林軽石層〕。小孔隙あり。可そ性、粘着性弱、ちみつ。ち密度は29mm。層界は漸変。

ⅥB21　226～254cm、褐（7.5YR4/4）色の埴壌土（CL）。発達中度の塊状構造。風化軽石、小レキあり。小孔隙を含む。可そ性、粘着性中、透水性中、ち密度は26mmで、上層よりやわらかい。層界は漸変。

ⅥB22　254～271cm、褐（7.5YR4/4）色の埴壌土（CL）、発達中度の塊状構造、孔隙あり、風化軽石なし、小レキをわずかに含む。可そ性、粘着性、透水性中、ち密度は23mmで、上層よりやわらかい。層界はやや漸変。

Ⅵ B 23　271～288cm、明褐（7.5YR5/6）色の埴壌土（CL）、発達中～弱度の塊状構造、小レキを含まず、可そ性、粘着性、透水性中、小孔隙あり、ち密度は20mmで、上層よりやわらかい。層界はやや漸変。

Ⅶ B 21　288～321cm、褐（7.5YR4/6）色の微砂質埴壌土（SiCL）、発達強～中度の塊状構造、赤褐色風化小レキを含む。可そ性、粘着性中、透水性小、かたい。ち密度は30mm。層界は漸変。

Ⅶ B 22　321～338cm、褐（10YR4/6）色の微砂質壌土（SiL）、赤褐色風化小レキは上層より多い。可そ性、粘着性やや中、透水性弱、かたい。ち密度は30mm。層界は漸変。

Ⅶ B 23　338～345cm、明褐（7.5YR5/6）色の微砂質壌土（SiL）、暗赤褐（5YR3/4）風化小レキは上層より富む。上層よりかたい。ち密度は32mm。透水性は小、層界は明瞭。

Ⅶ C　345～356cm、砂レキ層、暗赤褐（5YR3/2）、赤褐（5YR4/6）などの風化～半風化火山性砂レキ（スコリア質）である。層界は明瞭。

Ⅷ C 1　356～370cm、砂層、褐（7.5YR4/6）（50%）と赤褐色（5YR3/3）色の砂（50%）の混合した砂層。ち密度は31mmである。層界はやや明瞭。

Ⅷ C 2　370～383cm、砂レキ層、褐（7.5YR4/6）、暗褐色（5YR3/3）色の風化～半風化火山性砂レキ層。ち密度は35mmでかたい。層界はやや明瞭。

Ⅷ C 3　383～405cm、砂層、Ⅷ C 1 層と類似した砂層で、褐（7.5YR4/6）(50%)、暗赤褐（5YR3/3）色（50%）小粒で砂層を示す。ち密度は30mm、層界は明瞭。

Ⅷ C 4　405～424cm、砂レキ層、黒褐（5YR2/1）（40%）、暗赤褐（5YR3/4）(30%)、暗褐（7.5YR5/6）（30%）色の未風化、半風化～風化の火山性砂レキより構成されている。層界は明瞭。

Ⅷ C 5　424～436cm、砂レキ層、灰褐（7.5YR4/2）～褐（7.5YR4/3）色の小粒状、細砂レキよりなり、上層より粒径が小さい。層界は明瞭。

Ⅷ C 6　436～448cm、砂レキ層、黒褐（7.5YR2/2）(20%)、褐（7.5YR4/6）（60%）赤褐（5YR4/6）(20%）の火山性砂レキよりなり、粒径は上層より大きい。層界は明瞭。〔Ⅷ C 1～C 6は同じ火山性砂レキからできており、堆積を繰り返したものとおもわれる。〕

Ⅸ C 1　448～469cm、明褐（7.5YR5/6）色の微砂質埴壌土（SiCL）、にぶい褐（7.5YR5/3）、明赤褐（5YR5/6）色の風化軽石、白色風化物質が混在。発達弱度の塊状構造、小孔隙有り、可そ性、粘着性中、透水性小。ち密度は21mm、軽い。層界はやや明瞭。

ⅨC２　469～490cm、明褐（７.５ＹＲ5/6）色～にぶい褐（７.５ＹＲ5/3）色の混色の微砂質埴壌土（ＳｉＣＬ）、風化白色粒が上層より多く、粒径が大きい。発達弱度の塊状構造、軽い。小孔隙あり、可そ性、粘着性中、透水性小、ち密度は25mm、層界は漸変。

ⅨC３　490～523cm、褐（７.５ＹＲ4/6）明褐（７.５ＹＲ5/8）、にぶい褐（７.５ＹＲ5/4）、白色との混合した微砂質埴壌土（ＳｉＣＬ）、風化した白色粒が多い。発達弱度の塊状構造、小孔隙あり、可そ性、粘着性中、透水性中軽い。ち密度は18mm、層界は明瞭。

ⅨC４　523～568cm、風化軽石を含む砂レキ層、にぶいダイダイ（７.５ＹＲ7/4）（10%）、ダイダイ（７.５ＹＲ6/8）(40%)、黒褐（７.５ＹＲ3/2）（20%）、灰白（７.５ＹＲ8/1～8/2）色の風化軽石粒と半風化砂レキ粒よりなる。ち密度は21mm、層界は明瞭。

ⅩC１　568～584cm、褐（７.５ＹＲ4/6）色の微砂質壌土（ＳｉＬ）、褐（７.５ＹＲ4/4）、ダイダイ（７.５ＹＲ6/8）色、風化軽石小粒を含む。発達弱度の塊状構造、小孔隙あり、可そ性、粘着性弱、透水性中、軽い。ち密度は26mm、層界はやや明瞭。

ⅩC２　584～597cm、ダイダイ（７.５ＹＲ6/6）色の微砂質壌土（ＳｉＬ）、にぶい褐（７.５ＹＲ6/3）色の風化軽石小粒（20%）がみられる。小孔隙あり、可そ性、粘着性弱、透水性中、ち密度は19mm、層界は明瞭。

ⅩC３　597～625cm、灰白（７.５ＹＲ8/1）色（70%）とにぶいダイダイ（７.５ＹＲ7/3）色の混色した壌質砂土（ＬＳ）で、白色風化物質を主体としている。可そ性弱、粘着性弱。透水性弱軽い。ち密度は20mm。層界は明瞭。

ⅩＩC　625～776cm、明褐（７.５ＹＲ5/6）色の軽埴土（ＬｉＣ）～重埴土（ＨＣ）、発達極弱度の塊状構造。褐色マンガン斑あり、小孔隙を含む。可そ性強、粘着性強、透水性弱、湿潤。ち密度は18mm。

以上の断面調査結果より、本全断面は、最下部の円レキ層上の11断面によって構成されており、おもにⅠ～Ⅵ断面は風積性堆積物、Ⅶ～ⅩⅠ断面は水積性堆積物によるものと思われる。

土壌断面の記載に関する解説

１．土　壌　群：断面形態の主な特徴および母材、分布する地形などについて共通点をもっている一連の土壌統をまとめて土壌群とする。たとえば本断面は多湿黒ボク土（土壌群）（黒ボク水田をさす）―表層多腐植質多湿黒ボク土（土壌統群）一畦原統（土壌統）(30～60cm以下にアカホヤ層あり、埋没腐植層あり）となる。

２．土　壌　断　面：断面にみられる土壌層位の配列は層位分化の原因となった土壌生成過程を反映している。

3．土壌層位の区分：一般に土壌断面は上から順にA層、B層、C層などの3つの主層位から成立している。

(1)A　層：腐植で暗色に汚染され、有機物が無機物と結びついた腐植が多量に集積している層で、この層の質的特徴と形態的特徴（土色、構造など）によって細分するときはA_{11} A_{12}のように記す。

また、補助記号として、p（作土層で、plowingの略）、g（斑紋の存在）を用いて、水田の作土層はApg、また畑の作土層はAｐで示される。

(2)B　層：A層とC層の中間に位置し、母材の風化により生成された遊離鉄によって赤褐、褐、黄褐色を呈する風化層、あるいはA層から、洗脱された物質の集積層で構造が発達していることが多い。

B_1 層はA層とB層の漸移層でB層の性質が優越している層である。形態的特徴（土色、構造、土性など）により、B_2 層また、B_{21} 、B_{22} などに細分される。

(3)C　層：風化作用を受けてもろくなっているが母岩の組織を残している。土壌化はほとんど進行せずに無構造、いくつかの層に区分されるときは上から順にC_1 、C_2 ……のように細分する。

(4)埋没層：現在の土壌下に埋没した土壌については現在の土壌をⅠA、ⅠB、ⅠC、埋没土をⅡA、ⅡB、ⅡC…以下Ⅲ…、Ⅳ…とする。

4．野外土性の判定：土性は土壌断面の層位間の比較、風化の程度、異種母材の判定などの重要な目安となるので、現場で手ざわりや肉眼的観察によってだいたいの判定（野外土性という）を行う。（表1参照）

表1　野外土性判定の目安

判　　定　　法	土性名と略号
ほとんど砂ばかりで、ねばり気を全く感じない。	砂土(S)
砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない。	砂壌土(SL)
ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。	壌土(L)
砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような感触がある。	シルト質壌土(SiL)
わずかに砂を感じるが、かなりねばる。	埴壌土(CL)
ほとんど砂を感じないで、よくねばる。	重埴土(HC)

5．土 色 の 判 定：土色を調べようとする層位のなかから、代表的な色調の部分から適当な大きさの土塊をとり、標準土色帖を使い、土壌の色と一致する色片をさがす、土壌の色と一致する色片が決ったら色相、明度／彩度の順に並べ黒（7.5YR2／1）のように記載する。

6．ち　　密　　度：硬度計（山中式硬度計）を用いて平滑に整えた土壌断面に対し、直角の方向に硬度計を押しあて、その円錐部のつばが土壌面に密着するまで、ゆっくり水平に保ちつつ押し込み、その貫入の深さを数値mmで読み、その平均値で示す。

7．可塑性（表2）：可塑性とは、力を加えていくと変形し、力を除いたときその変形を保持する能力を表わす。野外での判定は、土壌を親指と人差指の間こねまわし、線状や細い棒状の形にできるかどうかによっている。

可塑性の強弱の区分は、土壌に充分な湿りを与え、親指と人差指との間でこねて粒団を壊し、こねている間に水分が蒸発し、土が指に付着しないようになったときに棒状にこねのばし、その状態を次の基準によって区分する。

表2　可塑性の区分基準（農林省、1961）

区　　分	基　　準
な　し	全然棒状に延ばせないもの。
弱	辛うじて棒状になるが、すぐ切れてしまうもの。
中	直径2mm内外の棒状に延ばさせて、こね直すのに力を要しないもの。
強	直径1mm内外の棒状に延ばせて、こね直すのにやや力を要するもの。
極　　強	長さ1cm以上の極めて細かい糸状に延ばせて、こね直すのにかなりの力を要するもの。

8．粘　　着　　性：粘着性とは、土壌を親指と人差指の間で圧して引きはなすときの付着する性質をいっている。粘着性が最大になるまで水分を与え、親指と人差指との間の付着性の強弱によって次のように区分する。

表3　粘着性の区分基準（Soil　Survey　Staff，1951）

区　　分	基　　準
な　し	土壌がほとんど指に付着しない。
弱	土壌が一方の指に付着するが、他の指には付着しない。指をはなすとのびない。
中	両指頭に付着する。指をはなすと、多少伸びる傾向をもつ。
強	指頭に強く付着する。指をはなすと伸びてくる。

（有村　玄洋）

図　　版

秋社川をはさんで第1郭を眺む

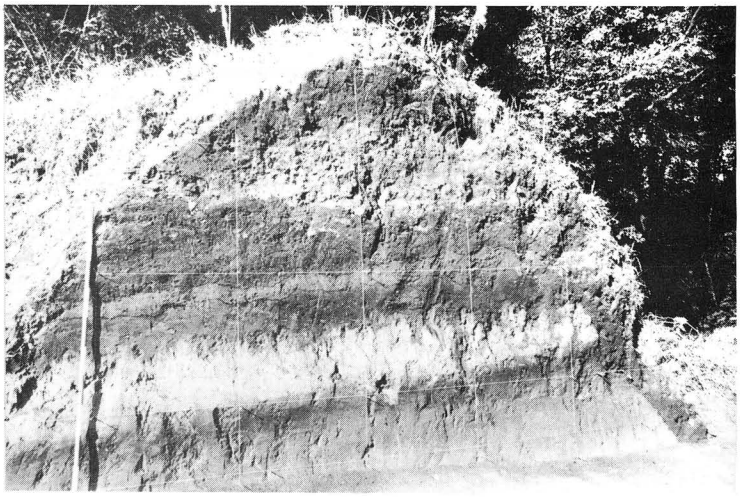
主　郭　部

第4郭（通称　井戸平）
ツリンデラ

図版２

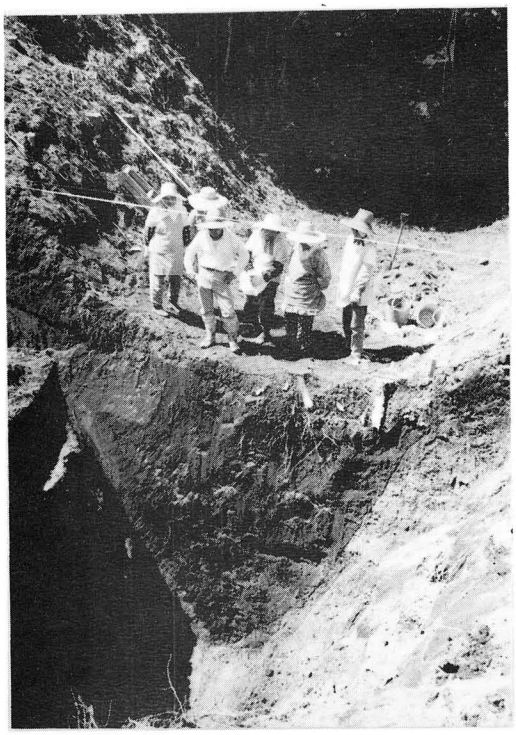
第２空堀・土塁
（杉林が空堀部）

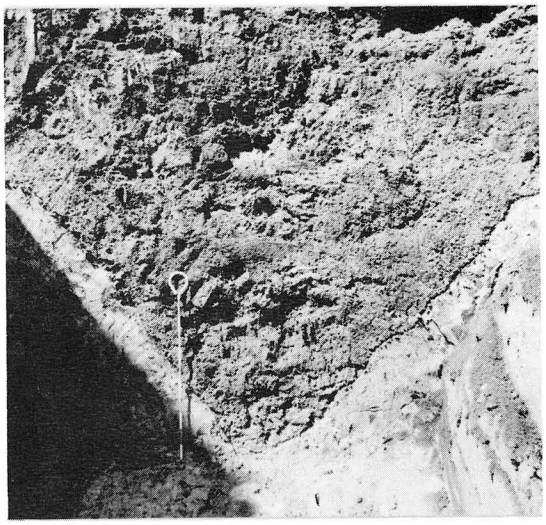
第２空堀断面精査状況



第２空堀土塁断面

第３空堀現況

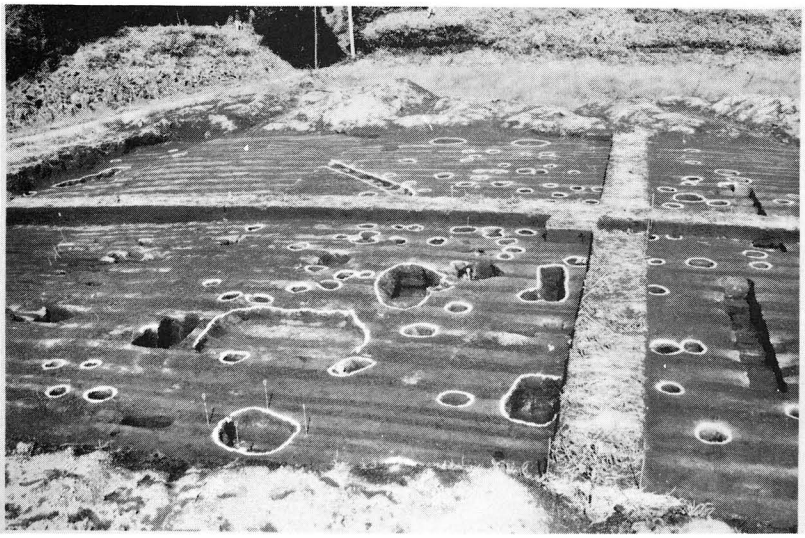




第３空堀底（薬研堀）

図版４

Ａ－２区発掘区（杉林は第２空堀、その手前が第２土塁）



Ａ－２区発掘区遺構検出状況

１号竪穴住居跡検出状況

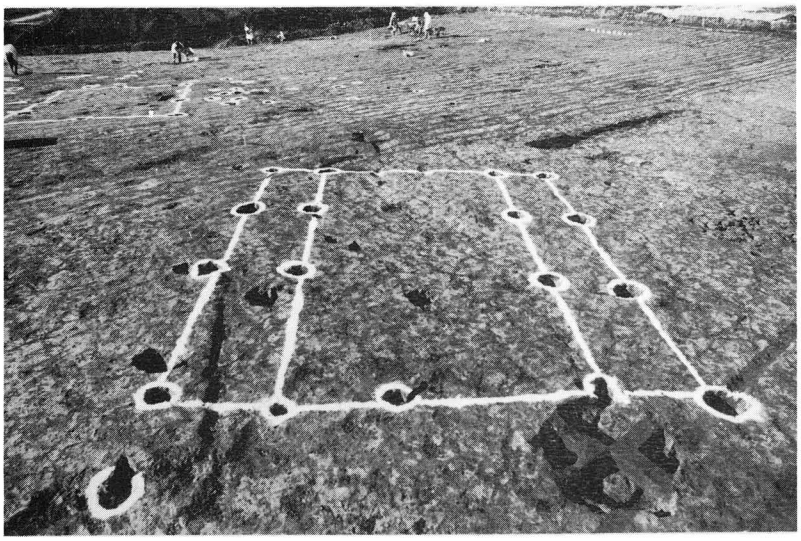
１号竪穴住居　・　２号竪穴住居

図版６

１号竪穴住居跡、遺物出土状況

竹串は泥板岩剝片

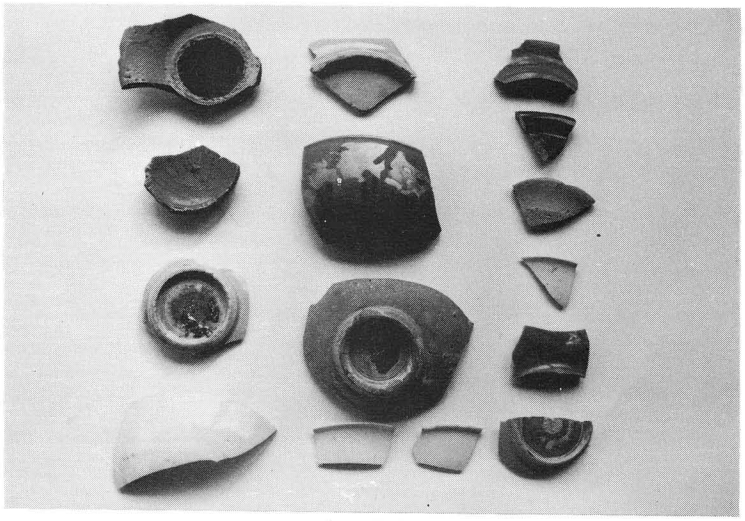
Ｂ－２区発掘状況



６号掘立柱建物跡

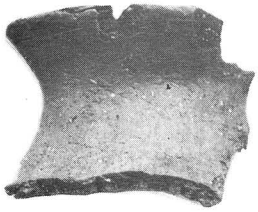
図版8

染付（碗・皿）〔輸入陶磁器〕

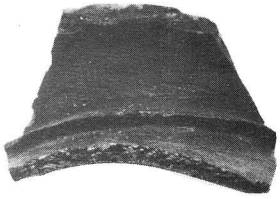


青磁・白磁（碗・皿）〔輸入陶磁器〕

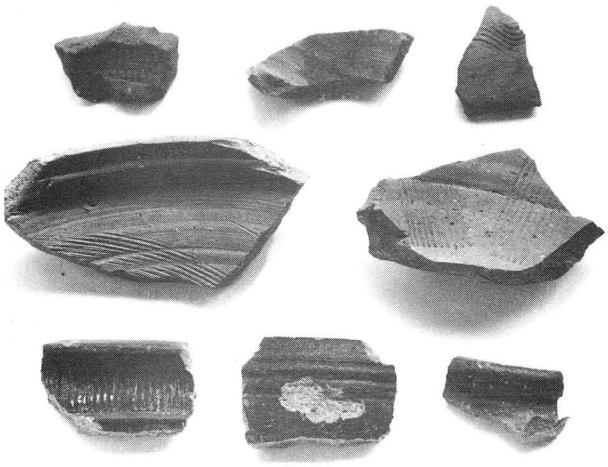
図版9



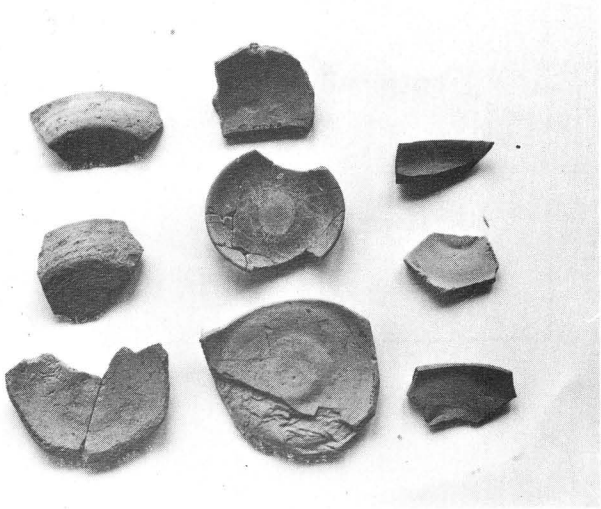
弥生土器口縁部
（1号竪穴住居出土）



弥生土器口縁部
（2号竪穴住居出土）



擂鉢・壺類(備前)、火鉢(瓦質土器)



土師器（坏）

紙屋城址遺跡発掘調査
概要報告書

発行年月日　昭和６３年３月
発　　行　野尻町教育委員会